

## 巻頭言

# メディアセンター中期計画2016-2020の策定

かざま しげひこ  
風間 茂彦

(メディアセンター本部事務長)



## 1 はじめに

2006年以来メディアセンターは近い将来の姿を見据えた中期計画を策定し、そのビジョンを三田、日吉、信濃町、矢上、湘南藤沢、芝の6地区のスタッフで共有しながら日常業務を遂行している。2016年はその改訂の節目の年にあたり、「中期計画2012-2015」の中間評価を基に、2015年4月から「中期計画2016-2020」策定のための検討を重ねてきた。当初2016年春のメディアセンター評議会での承認をめざしていたが、直近の課題解決に多くの時間を費やしてしまった結果、2016年11月の政策委員会での成案となり、12月開催のメディアセンター評議会で承認を得ることができた。

## 2 中期計画の必要性

そもそも最初の「中期計画2006-2010」は、当時の杉山伸也メディアセンター所長のアイデアが実現したもので、2006年6月に策定された。この時期、慶應義塾は2008年に創立150年を迎えるにあたり、「慶應義塾21世紀グランドデザイン」を公にしていた。それまで、メディアセンター本部および地区メディアセンターは、それぞれに毎年の「事業計画」を定めてはいたものの、中・長期的な計画を立案し、同時にそれを公開することはしていなかった。そもそも「中期計画」とは、組織のその時点における環境認識と、数年先の目指すべき姿を明らかに示すことにより、目指すべき次の時点に向けた取り組みを明確にするもので、対外的には存在価値を高める効果があるとともに、内部的にはスタッフ間での方向性の共有により、組織の求心力を高める効果があるとされている。たとえ学校法人であっても、業務による価値の創造が組織の存在意義である以上、昨今のような難しい時代には生き残るための経営ツールとして備えておくべきものであったと言える。

## 3 時代を映すそれぞれの中期計画

最初の「中期計画2006-2010」はトップダウンで策定された。その特徴は、来館型と非来館型サービスの両方を志向した「複合型」図書館サービスを目指すことを冒頭に謳った点である。同時に「経営面での改革」を大きく計画に取り入れたことも、メディアセンターとしては新機軸であった。それに続く「中期計画2012-2015」は、前回と異なり若手スタッフの意見をボトムアップで収集するところから策定が始まった。こちらは、「紙と電子」というメディアの拡張を意識した書き方になっており、同時にその時期に喫緊の課題であった大規模保存書庫建設計画の推進が、具体的な文言として希望的に加えられた。また様々な計画を実施するための具体的な行動計画が地区を分けて添えられていることも特色であった。

## 4 中期計画2016-2020

こうした流れを受けた今回の中期計画は、メディアセンター所長と各メディアセンター事務長で構成される政策委員会が検討・立案の場となった。保存スペース、施設、財源、人、組織、業務システム、社会連携については、配慮すべき業務インフラと捉え前書きに含め、それ以降を「蔵書」・「教育支援」・「研究支援」の3つの領域に整理した。そこには「来館型と非来館型」、あるいは、「紙と電子」と言った言葉はもはや登場しない。それは、それらがごく普通の事として我々の日常業務に内在化された証である。また、とりわけ情報の発信や研究支援の側面では、慶應義塾の「第Ⅱ期中期計画(2017-2019年度)」、および研究・教育・医療におけるグローバル化の一層の推進に向けた「重点課題」との整合性を意識して策定した。記述内容は共通的な総論に止め、詳細については各地区の事業計画で具体化することを明記し、中期計画と地区の事業計画との関係を明確に

したことは、これまでにない特徴である。メディアセンターは、2020年に向けて次に示すような「使命」・「将来像」・「中期計画」をスタッフ一同で共有しつつ、研究・教育・医療活動の一層の発展に向けて日々の業務を遂行してゆく所存である。

### メディアセンターの使命

メディアセンターは、慶應義塾の創始者福澤諭吉の建学の精神のもと、次の使命を担って国内外の学術活動ならびに社会に貢献する。

1. 学術情報を収集・組織・保存・提供することにより、慶應義塾大学における学習・教育・研究・医療活動を支援すること。
2. 慶應義塾大学における学術活動の成果の発信を支援すること。
3. 学術・文化の担い手として学術情報を後世に伝えること。

### メディアセンターの将来像

1. 世界中の価値ある資料を簡便に利用できる環境を提供する。
2. 学習活動や研究活動の変化に対応できる基盤環境を提供する。
3. 学生の主体的・自律的学習を支援する。
4. 急速に多様化する研究活動を支援する。

### 中期計画2016-2020

メディアセンターは、ここに掲げた将来像の実現を目指し、適正な保存スペース、利用施設、および財源の確保を常に意識しながら、以下の3つの領域の指針に従って事業計画を具体化し実行する。個々の計画の実施をより堅固なものにするためには、適切な図書館情報システムの選択が重要な課題となる。同時に施策の効果を最大限に発揮するために、絶えざる人材育成、適切な人員配置、無駄の無い組織づくり、塾内外との業務連携等に配慮し、効率的な運用体制の維持に注力しなければならない。そして義塾の国際展開をも視野に入れ、世界をリードする学塾に相応しい図書館を目指す。

### 領域1 蔵書

1. 学術情報流通の変化、利用動向を常に把握し、適切な媒体での資料収集に加え、既存蔵書を評価し最適な蔵書構成、および資料配置を目指す。
2. 研究および医療活動を支える環境の維持、発展を確保できるよう、電子資源契約を学内の合意を取りながら慎重に進める。
3. 分担収集や共同保存について、塾内のみならず塾外機関との連携をも目指す。
4. 慶應義塾が所蔵する特色あるコレクションを発展、充実させ、公開を進める。
5. 慶應義塾の学術成果の機関リポジトリへの搭載を拡充し、情報発信を強化する。

### 領域2 教育支援

1. 自ら考え、課題を解決する力を養う学習や教育を支援するための資料を収集、保存し、最適な利用環境を提供する。
2. 多種多様な資料から効率的かつ効果的に情報を検索し、適切に活用できる知識や技術を獲得できるように人的支援を強化する。
3. 留学生、生涯学習者、障がいのある学生など学習者の多様性に配慮し、変化する教育内容や教育方法にも対応できるよう蔵書、施設、および人的支援の充実を図る。
4. 安全で安心であるとともに、多様な学習スタイルに対応できるよう館内環境を整備する。

### 領域3 研究支援

1. 卓越した研究および医療活動のために必要な資料を収集、保存し、最適な利用環境を提供する。
2. 研究成果のオープン化を進めるために、塾内外の関係者との連携を強化し、研究成果の発信を支援する。
3. 世界の研究動向や義塾の研究状況を把握し、関係部門に情報を提供する。また、研究活動にとって有効な最新の技術動向を調査、検証し、図書館サービスとして提供する。

過去の中期計画：

[http://www.lib.keio.ac.jp/jp/headquarter/midrange\\_plan.html](http://www.lib.keio.ac.jp/jp/headquarter/midrange_plan.html)